

族が自分の育った家族とあまりにかけ離れていれば、なおさら理解することは難しく、むしろその家族に疑問を持つだけで終わる可能性がある。このことからライアソンでは、学生自らがどのような家族を持ち、どのような家族観を持っているかを考え自覚する機会を作っている。支援を求める家族に向き合う支援者は、自らの家族がどんなものか、どんな位置から相手を見ることになるのかを知っていなければならないとしている。相手を判断するにも自己の価値観が作用する可能性があり、家族に向き合う前に自分自身の家族を理解して、自身がいる位置を知っておくことを求めているのである。家族援助者としては当然考え、自覚しておかなければならないことだろう。

### ③自己の家族への理解

実際には、学生自身が育った家庭や家族をふりかえる、家族のこれまでの変化や段階を考えてみる、他の家族との差異について気づいたことを挙げてみるなど、そして課題があればその改善策を考えてみるなどが良いだろう。また、将来に向けて願っている家族像などを考える機会を持つことは、育った家族から出て、今後自ら家族をつくっていく移行期にいる学生にとっても、自覚を促す機会になると思われる。

### ④家族にかかわるグループ演習

その上で、ライアソンの「家族の課題Ⅱ」にある、家族の変化の一つをテーマとする模擬グループを企画し、改善に導くという学習法が興味深い。これに参加することによって、家族のある状況について考えるだけでなく、支援者としての責任やリーダーシップを学ぶことができると考える。いくつかのグループが発表しあえば、さらに学習の幅は広がるだろう。

## (2) 家族支援とは何かを理解すること

### ①家族支援の理論を学ぶ

現行の子育て支援にあっても、それが何なのか、何をすればよいのかについて、支援者自身に十分理解されているとはいいがたい現実がある。対象はさし当たって孤独な子育てに専念している母親支援が中心になっていて、その精神的サポートができれば良しとされることが多い。家族支援となるとさらに対象の範囲が広がり課題が複雑になり難しくなってくるのが推測される。支援のためのスキル、持つべき知識や情報もより多くが必要とされるだろう。これまで部分的にはあったにせよ、家族に対する総合的支援という考えや施策の乏しい日本には関連の文献も少ないことから、まずはカナダの家族支援やファミリー・リソース事業に関する文献を読み、理論的理解をすることが必要となるだろう。

### ②支援の実践から学ぶ

さらに支援者としての実践的な学びは、多くを支援の現場に求めることが必要である。学生が現場に赴き、子どもと親、ほとんどが母親であるが、に接して、ある家族に注目してその実情をクラスで報告する。科目担当教員が、背景となる父親、祖父母等を含めた家族、そして地域社会についてまで考え、そこへの支援策について検討していくことを課題としていくのはどうであろうか。学生同士が互いの体験を報告していく機会を持たれば、さらに家族支援への理解は深まるのではないか。この際に家族のプライバシーに配慮し、守秘義務についても徹底することが大切となる。

### ③ニーズから出発してできることを考える

支援は、支援を必要とする人や家族のニーズから始まる。まずは家族のニーズを把握することが必要である。

学生が実際に支援の現場に身をおいても、見えるのはそこにいる親子であり、それだけでは家族のニーズを見出すのは難しく、まして背景の家族の実態は見え

にくい。それは親の話や相談を通して分かることのほうが多い。家族の状況を学習するためには、知り得た事例から考えていくことが多く、そこから家族のニーズを推測し、改善点を考えていく手法をとることになるだろう。現場でのスタッフの話や検討会などの機会を得て学ぶことも考えられる。大学では担当教員がこうした事例をもとに、学生たちの問題意識や課題について検討し考察を加えていくことを奨励して、適切な助言や資料の提供を行うことが求められるだろう。

その結果、何をしたら良いか、自分たちにできることは何かを考え、現場に提案し、それを実践することが許されれば、理論と実践が結びつき、実践への自信にもつながると思われる。

#### ④社会的支援やネットワークについても学び、つないでいく

家族支援者であっても、一つの場で行えることには限界がある。他の使える資源やネットワークを知り連携できること、新たなネットワークを構築する力が求められる。学生の中にこれらを学んでおくことも必要である。

#### ⑤成人教育としてのエンパワーメント

支援の対象となる家族とは、大方親であり大人であることが多い。支援は、当人が自ら課題解決に向けて動き出す力をつけていくことが目標である。いわば大人に対する再教育であるとも言える。当人が持っている力を引き出す、自分に必要な情報や資源を見つけだし、それを使う力をつけるために何を提供するかが問われる。

支援者は何かをしてあげるのではなく、当事者が持っている力を信頼し、自らが課題に取り組む力をつけていけるよう働きかける、いわゆるエンパワーメントの考え方が主流になっている。当事者をエンパワーしていくためにプログラムを提供することも支援のあり方である。支援者に依存しないで仲間同士の

力で育ちあうことを目的とし、その場を提供する手法はファシリテーションと呼ばれているが、次項に述べる。

#### (3) 対人コミュニケーションとファシリテーションの力をつける

日本人の対人コミュニケーションは、小さい頃から自分の考えを言葉で表現する訓練をつんでいる欧米人に比べて苦手である。しかし対人援助を行う支援職には、人とコミュニケーションを取る力が求められることは大方の人が認めるところである。若い人たちはとくに、自分を表現し、相手と対面して話すことが苦手とされる。

ライアソンの科目のいくつかは、学生自身の自己関与や自己開示について扱い、自己認識や自己理解が求められている。対人コミュニケーションの科目では、自己と他者についての認識、聴きあう力、自己概念の強化、人との信頼関係を築く、自己開示の適切なレベルなどについて学ぶことが目標とされる。実際には授業の中での自己紹介、グループワークによる日常的な課題解決場面の発表を行い、学生同士のコミュニケーションを活性化させる演習を行っている。

#### ①適切な自己表現と対人態度の演習

人に向けて自分を表現することは意外に難しい。何をどこまで表現するかは人によって違う。その場にあわせて適度に自己開示し、人と交流を図ることはどこにいても求められる。支援にあたってはとくに相手から信頼されることが必要である。人から好感や信頼感を持ってもらうにはどのような自分であったらよいか、これは人の中に身をおいて、相手からのフィードバックを得るという経験をしていかないと身につかないことである。このために、グループの中で自分を語る機会を多く持つことが望まれる。人の話を聞き、自分も話してみても人の反応から自分の態度について修正

を図り、適切な自己開示の力をつけていくことができるだろう。自己紹介を始め何か共通のテーマ、好きなこと・もの、簡単に述べられる感想や思いを語るなどは、グループのはじめに行うアイスブレイカーで経験することができる。こうした活動によって自分を表現することに慣れ、お互いを知ることでもできると、安心して人との交流が容易になるという効果がある。

## ②学習スタイルやグループの発展について学ぶ

対人援助においては相手のことを知り、相手の学習スタイルを知ることが望まれる。つまり相手が受け入れやすいやり方や形は何か、効果的な働きかけを考えなければならない。経験したり観察することから入る、理論から入れる、新しい理論を入れていく、などを使い分ける。ライオンでは対人コミュニケーションを学ぶ際に、人の学習スタイルについて学ぶことになっている。

支援の場では、一人に対する相談を除いては複数の人たちを相手にすることが多い。ひろばなどではグループを相手にプログラムを進めることが多く効果もあげやすいことから、さまざまな取り組みが行われている。同じメンバーでセッションを続けていく「ノーバディズ・パーフェクト」のようなプログラムでは、グループの変化として、ばらばらであった個人がグループとしてのまとまりを得ていくと同時に、活発になってぶつかり合いも起きて混乱が生じるようにもなるとされる。しかしその過程を経てグループは一緒に何かをするという統一の段階に入り、実行に向けて協力するようになるという、グループには発達段階があるとされている。

グループのこうしたダイナミクスや変化について知っておくことは、支援者としてグループに対応して進めていくために必要なことである。

## ③ファシリテーションにおけるリーダーシップを学ぶ

グループに共通した課題を、グループメンバーの力によって解決していこうとするときに用いる手法がファシリテーションである。支援が必要な人たちを、指導者から指導される人にしないで、自らの力を使い、参加者同士が学びあうことによって解決策を探っていこうとするやり方で、リーダーを務める人はファシリテーターと呼ばれることが多い。ファシリテーターはグループを進行するためにリーダーシップを発揮するが、参加者に対して指導的ではない。しかし支配、調和、無秩序、民主的姿勢を使い分けることが必要といわれる。グループの進行に伴って適切なリーダーシップを発揮することによって、グループを課題解決に向けて進めていくことができるのだといえる。

ファシリテーションの技法を使うのは容易ではなく、簡単に身につくものではないが、学生のときからなじんでおくことによって、対人的態度、とくにグループや複数に人たちに対する力がつくと思われるので、演習などで経験を積んでおくことが望まれる。

## (4) 支援プログラムの企画力をつける

ひろばに限らず、支援に必要なプログラムを企画する力をつけておきたい。プログラムはやはり対象となる人々や地域のニーズを把握することから、そこで何が必要か、から始まる。人々のニーズ、そこで不足あるいは必要と思われることを考えることから始まるだろう。そのためにはその地域や背景をよく把握しておかなければならない。

その上で、そこでできること、使える資源や人手、場所などを考慮して企画を立てる。そのために現場に出向いてヒアリングを行ったり、参考になる実践を調べておくことも必要になるだろう。自分がやりたいこと、思いついたことを盛り

込んで企画を立てる機会でもある。ライアソンの「実習」ではしっかりとした企画書を作成して、それを発表し、レポートを提出することになっている。

そこでは企画のために現場調査をして実態をつかむことやプログラムを考案する力、実践的具体的な立案をし、それを発表する力などが鍛えられそう。その上、この一連の過程で個人的目標を立ててそれを達成していくことが課せられているが、それも個人として支援者としての資質向上に寄与するものであるといえる。

## 2)その他、支援職養成に加えたいこと

### (1) 子どもと親を理解し対応する力

子育て支援は、子どもが健やかに育つ環境を作るために、親や家族を支援するものであって、最終的には子どもへの支援であるといえる。したがって支援者は子どもへの視点を忘れてはならない。子どもの発達が保障され、子どもが健やかに育ちその心が安定する環境を作ることが望まれる。そのためには子どもというものを理解する素地をもっていなければならない。子どもの発達、いつごろどんな発達をし、どんなときに何が必要で何が大切なのか、その時々の子どもの気持などを心得て子どもに接する、あるいはその親に対応することが望まれる。

支援者養成課程が保育者養成課程に組み込まれていれば、子どもについて学ぶ機会も多いのでこの点はカバーできる。しかし保育の場における子ども理解そして保育とは、支援の場におけるそれと同じとはいえない。子ども集団を相手にする保育と、支援の場で親とともにいる子どもへのアプローチは、違ってくるからである。子どもへ接する場に常に親の存在があり、親子関係への配慮とともに親への視点、親を支援するかかわりも必要になってくるからである。

また現場では親から子どもにかかわ

る質問や相談をされることが多い。専門性を要することは、専門家との連携が必要であるが、その場で適切に対応する力、どこまでやるべきか見極める力、支援者同士で検討し協力する力などが求められるだろう。学生のときから支援の現場で経験を積んで、子どもとその親への理解を深め、親子の課題に対しても支援者として対応する力はつけておきたい。

### (2) 地域づくりとネットワークへの視点を育てる

子どもが育つ環境、家族と暮らす地域の環境が整っていることが望まれる。支援プログラムの企画にあたっては現状把握においても地域は考慮すべき要素である。プログラムとしても地域の人々をつなぎ、子どもが育ちやすい環境にしていく視点が大切になる。

地域は地理的条件や暮らす人々によってそれぞれ違っている。それぞれの状況に合わせた支援、それぞれが必要とする支援を考えなければならない。現行の支援は都市に偏り、内容も都市型になりがちである。人が少なく家族が点在する農山村や過疎地における支援にはそれなりのやり方があるだろう。都会型ばかりでなく、過疎地や農山村での支援策についての視点を学生時代から持っていてよいと考える。それぞれが育った地域環境における支援がどんなものであると良いのか、考える機会があるとよいだろう。

支援策は子どもと家族を対象とするが、その周りに位置する地域をつくることでもある。子どもと家族を中心に、地域の人や機関をつないでいく作業を進めることで、家族が暮らしやすい環境を作っていく視点も学生時代から養っておきたい。はじめは人と人を、そして機関をネットワーク化していくことで、子どもと家族、そして誰でもが暮らしやすい地域をつくること、家族とその子育てを支援することにつながるのではないだろうか。

## VI まとめと考察

### 1. ひろばにおける子育て家庭支援プログラム

昨年度の研究では、カナダの子ども家庭支援の実際、わが国におけるひろば利用者の支援ニーズ調査、わが国の支援者の意識とひろばの実態に関する調査を行い、そこから子育て家庭支援プログラムを作成し、提案を行った。

今年度は、そのプログラムをひろばで実際に実践してもらい、そこからプログラムを見直し、必要箇所を修正し、再構成を試みた。

本研究を通して、7箇所のひろばにおいて、全11プログラムの実践が行われた。プログラムそのものについては、大方問題なく実践されたことが報告され、その意義と実施可能であることが明らかとなった。中には、実施そのものが困難なプログラムもあったが、今後の可能性も含めて検証を行った。特に丁寧に実践を行い、その振り返りが行われた実践から得られたものは非常に大きく、プログラムへの反映も大きかった。その一方、活動としては展開されていても、その目的や趣旨に合致することが難しいケースもわずかであるが存在した。これもまた、今後、プログラムが実施される上での課題であることが明らかとなった。そのため、プログラムを豊かに展開するために、「子育て家庭支援プログラムの基本的な考え」「ひろばのプログラム・その活動のあり方」「子育て支援者の役割」という3つの切り口からの提言を行った。

以上の検討を通して、結果的に次の子育て家庭支援プログラムの提案を行った。

- 1) 常設でノンプログラムのひろば
- 2) プレママ・マタニティプログラム
- 3) 一時保育・相互預けあいプログラム
- 4) 親のエンパワーメントプログラム

- (親の自主企画講座、グループワーク)
- 5) 父親支援プログラム  
(父子体験プログラム、父親サークル活動支援、父親の育児座談会)
- 6) 学生の子育て支援プログラム  
(学生ボランティア、学生の子育て家庭参加プログラム、赤ちゃんとのふれあいプログラム)
- 7) 中高年世代との交流プログラム
- 8) アウトリーチプログラム  
(広報活動、出張ひろば)
- 9) 企業との連携プログラム
- 10) ひろばでの相談
- 11) 情報提供プログラム  
(子育て情報ライブラリー、転入・新米ママの子育て情報講座)
- 12) 児童館での支援プログラム
- 13) 特別なニーズへの対応プログラム  
(心のバリアフリープログラム、シングルペアレントのつどい)
- 14) 支援者の研修  
(スタッフ全体ディスカッション、傾聴トレーニング、親と支援者のロールプレイ、親グループ話し合いロールプレイ)

## 2. 支援者の研修

本研究は、「ひろば」を中心に子育て支援活動に携わるスタッフ・ボランティア・サポーター等、子育て支援者の資質・技能の向上を図るための研修プログラムを作成することを目的とした。

始めに現任の支援者を対象にして支援者研修に関するニーズ調査を行い、その結果を踏まえて、3日間・5コマ・12時間半の研修プログラムを作成、実践した。各回の終了時に行った受講者自身による学習評価の内容の分析結果によると、全体的に研修のねらい・目標を概ね達成していることが認められ、実践モデルの一つとして有用であると考えられた。

### 1)ひろば型ファシリテーターの養成

「ひろば」は親子が自発的に参加し、さまざまな人・もの・情報と出会い、主体的に学び、育ち合う場である。親子に安心して安全な場を提供しながら、一人ひとりの成長を促進すると同時にグループ全体の成長を促進をする人がファシリテーターである。基本的にノンプログラムですすめられるひろば型の支援では、このようなファシリテーターとしての資質や技量がスタッフ・支援者にはもっとも求められるところである。そこで今回、支援者研修プログラム・基礎編として、「ひろば型ファシリテーター養成講座」を提案した。

#### ① プログラムの構成

基本になる5つのテーマから構成される。全体プロセスを考慮して配置した。

##### 第1回

ひろば型ファシリテーターとは  
ーひろばの機能とスタッフの役割ー

##### 第2回

子どもへの理解と援助  
ー子どもへのかかわりと環境構成ー

##### 第3回

親への理解と援助Ⅰ  
ー親へのかかわりとひろば相談ー

##### 第4回

親への理解と援助Ⅱ

#### ー相談とカウンセリングマインドー 第5回

ファシリテーターに求められるもの  
ー支援者としての自己理解ー

#### ② 実施上の留意点

基本知識・技能を実践的体験的に学び、支援者自身の自己理解、自己成長をめざすもので、そのための配慮点をあげる。

- \* 研修全体としての一貫性
- \* 継続参加を受講の条件とする
- \* 講義でなく参加型の学習形態
- \* ロールプレイやグループワーク等の演習を増やす。
- \* グループ編成に留意する
- \* アイスブレイカー、ウォーミングアップ等で学習し易い雰囲気をつくる
- \* 毎回「自己評価」(ふり返り)を行う
- \* 受講者からの質問・意見を毎回フィードバックし、全体で共有する
- \* 研修終了後のフォローアップをする

### 2)今後の課題

ひろばプログラムのあり方について提言している渡辺氏は、スタッフ研修に必要な学習内容として、i 対人援助の基本的スキル。カウンセリングの初歩的な技術、とくにリスニングの技術。ii グループワークの基本スキル。グループダイナミクスの把握やグループディスカッションの進め方等、初歩的な技術 iii ネットワーキングの基本的スキル。iv ボランティア・マネジメント v 子ども家庭福祉施策や子育てサービスに関する知識 vi 子どもの発達に関する基本的知識 vii ピア・スーパービジョンを提案をしている。とくにiiiやivの視点や、虐待、うつ病等子育て支援の場で無視できない現代的な心の問題等、重要な課題は多くありフォローアップ、ブラッシュアップのための研修の中で取り組む必要がある。

基礎プログラムのほかに、研修対象・ニーズに応えられる多様なプログラムを作成すること、また研修後のスキルアップのための連携システムをつくること等が今後の課題となる。

### 3. 支援職としての専門性を養成する カリキュラムについて

#### 1) 養成課程で家族支援を学ぶ

子育て支援における支援者をめざす人たちは多くなった。NPO等市民団体としての活動はすでに始まっていて、各地での取り組みも盛んである。子育てひろばやつどいの広場は今後も増えつづけることが予想される。そこで働くスタッフとその働き方はさまざまである。保育所に設置された地域子育て支援センターのスタッフは保育士が兼務することが多く、保育士としての専門性を持っている。この専門性は特に子どもに接する上では有効に働くと考えられるが、子どものみに視点がいくきらいがないとはいえない。

保育士がかつて受けた養成課程に、子育てや家族支援に関わる学習は含まれていなかった。現在活躍している保育士の子育て支援は、長年かかわってきた保育の経験から得た親への対応力で間に合せているのが実情である。いま、保育者をめざして入学してくる学生にとっても、親支援や家族支援について学ぶ機会は「家族援助論」等一部の教科以外では難しいのが現状である。保育現場にあっていままは保護者、親支援にも対応を迫られている。養成の段階からこうした専門性を身につけていくことが望まれる。

その他、数多くの子育て支援の現場にいるスタッフで、子育てや子育て支援、家族支援にかかわる専門性を持った人は少数派であろう。しかし子どもや親を囲む環境は厳しくなっており、親子や家族が抱える問題も深刻化している。親や家族が抱える課題に気づき、的確にかかわっていく専門性は今後必要性を増していくことが予想される。現役の支援者研修はもちろんであるが、これから保育者や支援者として現場に出て行く以前の養成課程において、これらの専門性を学んでおくことが必要であると考えられる。

Vにおいては、支援現場のヒアリング調査およびカナダの大学における家族支援職養成カリキュラムを検討して、支援職という専門家を養成するための提言を試みた。以下に、日本の保育者養成にも不足していて、支援者の専門性として加えていきたい点をいくつか指摘しておきたい。

#### 2) 家族支援の専門性にかかわる学び

- ①子どもが育つ環境としての家族を支援するという視点から、社会の中の家族とその課題への理解を深める。そのうえで支援のための的確な知識や技法を学ぶことが必要。
- ②自己への認識を深めること。家族、社会における自分の位置や考え方について自覚し、支援にあたる自身の姿勢を認識しておくための学びが必要。自分自身を知ることは、相手を理解し、関与していく力につながる。
- ③人に関心を持ち、交流する力を育てる。適度な自己開示をし、一方的でなく相手とコミュニケーションをとる力を育てる。
- ④相手を信頼し、その人自身が力をつけていけるようエンパワーしていく力をつけるために、グループを対象とするファシリテーションの技法を学ぶことが望まれる。

#### 3) 家族支援専門職の位置づけと雇用

最後に、家族支援者という専門家の養成を保育者やソーシャルワーカーなどの課程の中に位置づけること、修了したものを支援の現場に職員として雇用し、配置していくことを期待し、強く要請したい。

## 4. 父親の育児参加のための提言

### 1) 子育ての状況

父親は外で働いて経済的に家族を支え子どもを育てているという、父親側の自負はともかく、専業主婦の母親がほとんど一手に育児を引き受けている子育ての現状の中で、さまざまな問題は起きてきている。親側の状況だけを見ても、育児不安、虐待、受験戦争への加担、過保護過干渉等の問題を抱えている。こうした親側の状況だけに原因を課すわけにはいかないが、子どもの育ちには、若年犯罪、不登校、引きこもり等々の増加という、危惧すべき問題が山積している。

子育て支援が始まった頃の、仕事と家事育児の両立をねらった両立支援から現行の子育て支援まで、制度の趣旨から見てその対象は子育て中の母親であり、最近はとくに専業の母親を支援する内容に力が入っている。初めから父親は想定外であり、父親自身も子育てが我がことであると思っていない節がある。そうした中、育児休業制度は両親を対象としているものの父親の取得率は微々たる率で推移した結果、10%に上げようとする目標が示されたのは評価できるのであるが、その効果は皆無と云ってよいだろう。

### 2) 子育てを担うのは誰か

昔は結婚して子どもを育てるのは当たりまえで、誰にとっても人間としての義務のようでもあった。が今は産むか産まないかの選択が個人に任されている。産んで育てるのはあまりに大変、負担が大きすぎる、産むに値しない世の中だから、などが産まない理由だとすると、その要因を取り除く努力を社会もしていかなければならないのではないだろうか。

「子どもを産んで育てやすい社会に」というスローガンはエンゼルプランの中にも示されている。以来10年余が経過しているが、そうした社会になっているだろうか。支援策や制度は進展している

ものの人々の性別役割分業的意識は旧態依然とした感は否めない。日本の経済発展は実はこの性別役割分業に依拠してきた結果なのかもしれない。またその結果がいまの少子化であり、この少子化が将来国の経済を脅かすことになりかねない事態を招くという皮肉な事態が予測されている。

母親が生物学的にとくに初期の育児に向いているという論議はともかくとして、家族を形成し社会生活を営み、長期の養育を経てようやく一人前になる人間としては、父親は母親に増して重要な存在である。子育てに付与される社会的支援以前に、父親はもつとも有効な子育ての資源である。その父親が子育てをそのパートナーである母親に任せきり、またやりたくてもできない状況は、当の子どもはもちろん社会にとっても大きな損失であろう。企業が利することとは裏腹に、家族が扶養されることと引き換えに、当然のこととして父親不在という不利益を強いられてきたのではないだろうか。

### 3) 両親の働き方と育児休業制度

乳幼児の父親である30代前半の男性の就労時間が週に60時間以上の比率が最も高い南関東において、出生率が最も低いという統計が2003年厚生労働省から出されている。少子化との因果関係を示す一つの要因が明確となった感がある。

こうした働き方の中で父親の育児休業取得率は0.4%にすぎない。これに比して女性の取得率は56.4%になっているが、出産1年前に有職であった母親の67.4%は無職となっており、出産を経て残っている32.6%の中の取得率である。つまり出産前には働いていたもと有職女性の18.4%が育児休業を取得して職をつないでいるに過ぎない、つまり働いていた女性の5人に4人強が子育てのために離職したことを示している。このことは、日本女性のM字型雇用の実態を示すものであり、子育てが女性の肩に掛かるという役割分業を証明する数値であると



いえる。と同時に、とくに女性にとって子育てが如何に仕事と両立しにくいかということも示している。

片や仕事を続ける選択をした女性のうち、この育児休業を取らないで仕事を頑張っている女性も40%以上おり、また男性は女性以上に育児休業を取りにくい現実もあるだろう。制度はあっても絵に描いた餅の職場も多いと聞く。これでは次の子どもを産む決意もつかないこともおこるだろう。男女ともに育児のために休業しやすい制度や職場となることがまずは必要である。

#### 4) 父親の育児休業の義務化

この制度が実効性のあるものとなるには、一つは父親に少なくとも1ヶ月以上の育児休業を義務付けることであり、もう一つはそのために企業側への助成を行うことが望まれる。休業期間は育児によりやく慣れて子どもとの絆を作るために最低1ヶ月は必要である。仮の、一時だけの親役ではなく、一定期間連続して親の役割を乗り切ることが、その後の子どもとの強い絆の基礎となり、親としての責任を果たす姿勢と自信が築かれていくのである。このことは人間として職業人としても豊かな体験となり、その後の人生に、また仕事においても無駄にはならない経験になると考えたい。

経済最優先、営利を迫及する企業としては従業員の子育ては私事であり、その仕事には差し障ることになるだろう。ならばだれも子育てはしなくても良いということではない、社会全体、国家、人間の存亡から考えればそれは否である。では誰がそれをするのか。子どもを産み・育てるのは私事でもあるが、誰かがそれを担わなくてはならない社会的な義務ではないだろうか。

次世代を育成することが国や社会の債務であるならば、必要なことを互いに分担していかなければならない。国からの補助金、企業による拠出、育児保険の導入等によって、男性も子育てに参加しや

すいシステムを構築していくことは急務である。とりあえずは育児休業取得を義務化し、また労働時間短縮もしくはワークシェアリングによって、仕事と個人生活のバランスをとるライフスタイルを一般化していくことを提案したい。

#### 5) 父親支援プログラムの奨励と啓発

育児休業を取得する父親が増えていけば、また少数であればなおさら、その父親が孤立しないよう、育児支援が必要である。育児をする父親が一般化するための啓蒙、社会的雰囲気醸成する努力も必要であろう。

支援プログラムについては、本研究の主テーマであるⅢに示された支援プログラムを参照されたい。ここには、「父子体験」「父親サークル活動支援」「父親の育児座談会」の3つのプログラムを提案している。ただし、これらのプログラム実施で重要なことは、プログラムを通して、子どもとかかわることのおもしろさを実感することに加えて、父親としての意識を実感できるものであることである。またさらに、父親同士あるいは子育てにかかわる大人同士がつながること、つながる場となることが非常に重要である。

こうした場や機会を通して父親同士が繋がり、互いに父親としての意識を高めていくこと、父親自身が子育てに対して肯定的に捉え、子どもとともにあることを楽しみ、価値を感じて取り組む意欲を持てるようになることが大切なのである。そのためには、単にプログラムを実施するだけでは不十分である。1回限りのイベントに終わらず、継続性のあるものとなることが望ましい。それは、また参加したいと思えるような内容と、父親同士や子育てにかかわる人たちが顔見知りになり、主体的なつながりが生まれるようなものでなければならない。そのためのプログラムの工夫と評価が必要である。わが国において、このようなプログラムが普及されることが急務である。

## 6) 父親グループ・ネットワーク構築の奨励

仕事優先のみ、仕事にかまける父親だけではなく、子育てにかかわりたいあるいはかかわっている父親もいる。子育ての意義を感じ、父親の存在が子どもにそして母親にとっても大事であることを認識している人たちであり、仲間を作って行動を起こしている人たちもいる。

カナダでは全国的な父親のネットワークがあって、インターネットを通して「[www.mydad.ca](http://www.mydad.ca)」等が、父親に対してかなり啓蒙的な働きをして成功している。ホームページには子どもたちと日常的にふれあう父親の温かい写真とともに「父親であること、それは地球上で最高の仕事」のフレーズが添えられ、魅力的である。子どもとの楽しそうな、肯定的な姿をアピールすることで、父親であることへの価値を感じることができそうである。

子育てとは日常的なものであり、身近な父親同士の関係をつくることも大切である。まずはそれがはじめの一步かもしれない。ひろば等の支援の場がその仲介役を執ることはもちろんであり、ひろばにおける父親支援プログラムがそのようなつながりを生み出し、グループやネットワーク化のきっかけとして機能することは先に述べた通りである。最近では「おやじの会」があちこちに誕生しているが、そうしたグループ活動やネットワークがさらに広がり、活動が深まっていくことが期待される。

こうした父親同士のネットワーク化が進むことによって、多くの母親たちがすでに始めている市民活動の一翼を担い、子どもや子育てのためにまた家族の一員としても、父親という仲間とともに自らの活動を始めていく姿勢に、これからも強く期待したい。

そこに、社会的支援や公的助成金などの支援が加われば、さらに活動に広がりが出てきて、子育ての層に厚みを持った地域や社会を作っていくことができるのではないかと考えている。

## おわりに

2004年度の合計特殊出生率が前年と同じ1.29、と出た。4年連続で過去最低の記録という。数々の少子化対策、次世代育成支援対策が次々と打ち出されてきた中のことである。仕事と家事育児の両立支援から始まり、最近では富に在宅の子育てを支援するつどいの広場等に力が入り、とくに専業で育児に専念する母親支援が盛んになってきている。本研究が目的とした子ども家庭支援プログラムは、0歳から3歳までの子どもとその親を対象とするものであるが、父親も視野に入れて父親向けのプログラムも提案している。

3歳までの乳幼児を育てる母親の就業も就業希望者率も上がってきてはいるが、その年代の子どもを育てているのは圧倒的に専業の母親である。この実態の中で出生率は一向に上がっていかないのが実情である。国も企業もこの事実によりやく気づいたのか、子育て期の男性の働き方、仕事と生活の両立、父親の育児参加の必要性に目を向けるようになった。母親だけでなく父親が取りやすい育児休業制度を手始めに、父親による育児を容易にする社会システムの構築と父親向け子育て支援を充実させていくことも急務である。本研究では、父親支援についてもいささかの提案を試みた。

子育てをする家族への支援はそのニーズに応え、家庭に近いひろば等において、個人の主体性を尊重し、その育ちを保障し力をつけるエンパワメントを基本とすることが望まれる。個人や家族の力を信頼し、当事者が力を発揮できるように支えていく。母親も父親も仲間同士がつながって自らの経験から学びあい、自信を持って子育てをしていけるように支援していく拠点が、身近な地域にできていくことを期待したい。

こうした支援を提供するひろばでは、その鍵となるのが支援者の力量である。本研究では、支援者の研修についてもプログラムを提案している。またカナダの支援職養成プログラムを紹介して、日本での支援者養成の方向性も示した。

以上、2年にわたる研究成果が、低迷する日本の子育てに些かでも資することができるならば幸いである。

ここに本研究に従事する機会をいただいたことを感謝申し上げます。

「子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究」

研究班一同

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり、つどいの広場全国連絡協議会、関係団体ほか、実にたくさんの方々の協力をいただきました。ご協力をいただきました全ての皆様に、深く感謝申し上げます。

## 巻末目次

### プログラム実施報告

(1) プレママ・マタニティプログラム	
① びーのびーの プレママ・マタニティクラス	129
② 手をつなご プレママのためのおしゃべり広場	133
(2) 一時保育・相互預けあいプログラム	
① みずべ ファミサポとひろばのドッキング	136
② まめっこ 一時保育	139
(3) 親のエンパワーメントプログラム	
① みずべ NPを応用したグループワーク	142
② くすくす 親の自主企画講座	150
③ まんま 親による自主企画講座「スイーツ de ゆんたく」	155
④ みずべ 親の自主活動	158
(4) 父親支援プログラム	
① びーのびーの 父親座談会	162
② わははねっと 日曜！パパのための子育てひろば	167
(5) 学生の子育て支援プログラム	
① びーのびーの 学生による家庭育児支援地域ネットワークモデル事業	172
② みずべ 赤ちゃんとのふれあいプログラム	176
(6) 中高年世代との交流プログラム	
① びーのびーの 子育てサポータープログラム	179
② 手をつなご 中高年のボランティアプログラム	182
(7) アウトリーチプログラム	
① みずべ 子育て家庭訪問プログラム	186
② まめっこ 親子教室	188
③ みずべ 出張ひろば	191
(8) 企業との連携プログラム	
① みずべ 企業との連携プログラム	194
② びーのびーの 企業との連携プログラム	198
(9) ひろばでの相談	
① びーのびーの ひろばでの相談	200
(10) 特別なニーズへの対応	
① くすくす 障害のある子どもとの関わりの中で	202
(11) 支援者の研修	
① びーのびーの みんなで話そう会	207
(12) 情報提供プログラム	
① びーのびーの 情報提供	212
② くすくす 広報活動	216
支援者アンケート	221
支援者アンケート分析レポート	223
研究組織・構成員	226
執筆担当箇所	227

## (1) プレママ・マタニティプログラム

### ① びーのびーの 「プレママ・マタニティクラス」

実施ひろば名  
おやこの広場 びーのびーの

実施担当者名  
担当助産師：阿部かおる、小野田由紀子、岡本美和子  
ひろば担当：絵本担当  
協力者：鍼灸師 ととろの森 小林規智子先生

#### 目的

妊婦さん、及びその支援者である家族の方を対象とした、参加型マタニティクラスを行うことで、地域の中での支えあい、育ち合えるという意識付けのできる場を提供する。

#### 目標：

① 自ら進んでお産に取り組む意識を獲得する。

・自分にとって納得のいくお産の経験  
←自己決定の結果としてのお産であると思える体験をする。

e x, 自然分娩・帝王切開・吸引分娩 e t c …

⇒お産がゴールではなく育児のためのスタート地点。

② 妊娠中からの地縁、仲間作りを行う。

・子育ては孤独じゃない。孤立しないための仲間作りの過程を経験する

・自分にとって必要な情報へアクセスが

できさらに、選別することができる。

・子育てにおける自助力を高める機会を獲得する。

③ 母親が癒される場所を見つける。

・自らが「問題解決できる場所」を求めることで、安心感を得る。

・苦しい時、困った時、大変な時、その気持ちを共有できる場と人を見つけることができる。

#### 実施対象者

妊婦とその家族。初産婦だけでなく、経産婦も対象。

#### 実施の方法と概要

① 開催日程：年に4コース程度 水曜日とその後の土曜の2回実施で1コース

② 広報宣伝方法：専用チラシ作成配布方法

■ 近隣産婦人科リスト（あり）⇒毎回郵送。11箇所

■ 赤ちゃん会リスト（なし）⇒担当スタッフが配布

■ 保健福祉センター⇒平置き

○ ポリオ 4月10月 接種後の親に現地で配布

○ HP、広報紙での告知

■ 港北区の両親学級での配布

■ マタニティ・スイミング（新横浜）& よこはま自然育児の会⇒配布・会報掲示

3) 企画参加費：①500円（安産の為のリラクゼーション講習代を含む）②300円

マタニティクラス開催実績

日時	プログラム名	講師名	参加数
1/22	マタニティクラス4-①	—	—
2/1	マタニティクラス4-②	小野田由紀子・阿部かおる	2
5/28	マタニティクラス1-1	西村雅子	2
6/7	マタニティクラス1-2 ・ピアノと絵本といっしょに	佐田・小野田・阿部・岡本・岩崎	3
9/17	マタニティクラス2-1	小林規智子	3
10/4	マタニティクラス2-2・ミニおはなし会	小野田由紀子・松本さゆり	2
11/26	マタニティクラス3-1	小林規智子	1
12/6	マタニティクラス3-2・ミニおはなし会	阿部かおる・岩崎久美子	1

実施内容

1回目：水曜日実施（お産までについて）  
\*自己紹介・・・名前・初経産・妊娠週数・分娩予定施設（その特徴）・

最近の体調など気になっていること・うれしかったこと など。

\*リラクゼーションの体験→鍼灸師 小林先生の指導のもとに皆で体験。（いくつかのパターンを体験し、自分にフィットするものを見つけもらう）

\*座談会（サークルになって自由な姿勢で）

→コーディネーターによるアレンジ。

・食事や運動、日常の生活について

→気をつけていること？気になっていること？心配なこと？

・お産について→どんなイメージ？自分はどんなお産をしたい？どんな所でお産をする？心配なこと？気になっていること？

\*全体を通しての質問：フリートーク・個別 time

\*次回の予定についてインフォメーション

2回目：土曜日実施（産後の育児について）

①前回から今日までの様子・変化。ご家族が感じていること。

妊娠をきっかけに変ってきたことなど。

②リラクゼーションの確認

③座談（サークルになって、自由な姿勢で）

・産後の生活について

→経験者であるお母さんに参加してもらう。

準備しておいてよかったこと・意外だったことなど

・赤ちゃんとの生活について

→どんなイメージ？心配なこと？気になっていること？

・授乳について→どんな授乳方法をしたいのか？（意識づけしたい）母乳の場合（妊娠中から準備できること・産後の乳房の変化・頻回授乳について・食生活について）

※お楽しみ time! ex. ピアノ演奏、絵本のおはなし会（これからパパ・ママになる方へ絵本の紹介を兼ねて）

④横浜の育児支援情報について

→皆で共有する時間：経験者のお母さん（シフトスタッフ他、会員さん）に参加してもらう。すでに知っていること、さらに知りたいこと等

・びーのびーのの紹介  
どうしてびーのを作ったか。マタニティ  
企画をする意図。など。  
妊娠中から、見学・参加可能な件(マタニ  
ティ参加費を設けた)。

#### ⑤全体を通しての質問

フリートーク、個別 time

※最後に参加者に感想、意見、要望を自  
由に記載してもらい、次回への反省・改  
善に役立てる。

#### ⑥最後に

「近況報告はがき」(妊娠初期～中期の方  
用)、「生まれましたはがき」(全員)にお  
渡しして、様子をご連絡頂く。

#### 実施結果

①参加者の感想・生まれましたはがきか  
ら

#### ②担当スタッフ感想

(平成17年2月号の広報紙より抜粋)  
まずは、鍼灸師の小林規智子先生の指導  
で、皆で肩こり・腰痛のためのマッサー  
ジヤツボ押し。「極楽～極楽～♪」の気分  
で身も心もほぐれ、そして出産・育児の  
話に花が咲きました。逆子などの個別の  
相談にも、お灸や足ふみなどの具体的な  
対策を教えていただき、10日後には逆子  
が治り無事出産を迎えた方もいらっしゃ  
いました。

また参加者それぞれの妊娠や出産の体験  
談、夫を育児に引き込む方法の話では、  
毎回クラスの全員が笑いと感激の輪にな  
りました。「正直子どもが好きではなかつ  
たけれど、ここに来て私にも出産や育児  
が出来そうだと感じられました。」と話し  
てくれる方もいらっしゃいました。終了  
後のアンケートでも「具体的な体験談を  
聞いて、産後の不安が解消されました。」  
「普段病院では聞きづらいことが素直に  
聞けてよかったです。」などと書かれてあ  
り、私たちもとても嬉しく思いました。  
絵本の時間では、ひろばに来ていた親子  
全員と一緒に加わり、妊婦さん・会員のお  
母さん・子ども達の輪ができたようで  
す。子どもたちもびっくりするくらい静

かに絵本に集中して聴いていましたよ。  
クラス進行中、ひろばの子ども達がまわ  
りて泣いたり笑ったり、プレパパのお膝  
に抱っこされたり。そしておっぱい授乳  
の様子も目の前で見る事ができたり。  
これから訪れる育児の様子を垣間見る  
ことができ、またひろばに集まる皆から  
出産や育児についての智恵や勇気をい  
ただけたのではないのでしょうか。

助産師という立場以前に、母親としての  
私自身を振り返りながら「いろんな人、  
いろんな子どもがいて、そしてそれぞ  
れの育児があつて、それで良いのだ」と  
いう想いを皆さんに伝えられたら・・・と、  
参加される皆さんと毎回試行錯誤でク  
ラスを作り上げています。マタニティ・ク  
ラスを修了され、親になり赤ちゃんをひ  
ろばに連れていらっしゃる姿がとても嬉  
しく、私たちの励みとなっています。3  
月5日(土)のマタニティ・アフターク  
ラスで、たくさんのご家族にお会いでき  
る事を楽しみにしております。

(スタッフ 阿部かおる・小野田由紀子)  
初年度の学生ボランティアであった方が、  
卒業、就職を経て、結婚、なんとびーの  
びーののマタニティクラスに来てくれま  
した。つながっていると実感できました。

#### その他

##### 対外活動

①第18回日本助産学会学術集会参加

日時：3月6日(土)・7日(日)

場所：東京大学安田講堂

テーマ：喜びとともに生まれる、その先  
の助産ケア

シンポジウムにて「びーのびーのの取り  
組み」を発表 発表者：奥山千鶴子

お産後の子育て環境に関心を持つ助産  
師が増えていると実感する。妊娠期から  
出産、そして育児と連続性のある中で助  
産師としての専門性をどう生かすのか、  
助産師と子育て支援団体の連携が必要と  
感じた。学術総会でこのように地域活動  
をも取り入れていることに驚くと共に、  
今後学術分野と実践分野の連携・融合が

必要であることを強く印象づけられた。

## ②いいお産の日イベントに出展

日時：11月3日（月曜：祝日）

場所：一ツ橋ホール 日本教育会館

主催：厚生労働省・（財）こども未来財団

共催：NPO法人いいお産プロジェクト

後援：健やか親子21推進協議会

・ブース出展：ひろばの紹介・書籍販売

11月3日雨天にもかかわらず、多数来場者があった。お産の劇や擬似妊婦体験ができたり、マタニティフラダンスなど興味深い内容のイベントだった。

## ③ほっとマタニティコンサート&赤ちゃんサロン実施

日時：平成17年2月19日（土）

場所：港北公会堂

主催：こどもの城企画研修、NPO 法人びーのびーの

太田光子さんのリコーダー演奏と、産婦人科医師・安藤一人氏のユーモアあふれるトーク、実際に赤ちゃんを抱っこしたり、遊ぶ様子をご覧になれる、赤ちゃんサロンも開催。

対象：妊娠中の方とご家族 参加費無料

保育：定員40名（1歳半以上未就学児まで） 保育料無料

## 評価—プログラム実施の意義と課題

### ①ひろばの中でプログラム実施をする意義

当初、設立メンバーがそうであったように、子育て中の互助活動としての「ひろば」の運営には、専門家である前に一人の親の立場で関わるといった視点が大事にされました。スタッフの中には、元保育園で働いていた、元児童館で働いていた、とか福祉・教育関連の資格をもつものもいましたが、その専門性を全面にだして関わらないということにこだわりをもったのです、これは助産師といえども同じでした。これは、子育ての日常を大切に生活の場としてひろばが地域にある中で、子育てを専門家に頼らず、自分たちで体験し、考え、支えあうといった

環境を重視したいとの思いからでした。

しかしそのように考えれば、ひろばのスタッフの力量というものがたいへん重要になり、研修・話し合いの充実がさらに重要であるということに結論づけられます。

びーのびーの発足時から出産・子育てをトータルにサポートしたいと願っていたところ、子育て中で仕事をしていない助産師がひろばに関わり始めました。子育て真っ最中の親として、専門性を発揮しながら関わってくれています。

「一人の子どもを育てるには村中の人がいる」のたとえ通り、いろんな考え方の人、専門性を持つ人、年代の違う人など多様な人との出会いが子育てには必要です。しかし、子育て中は分断する病院や施設など非日常的空間である専門機関に親子がそれぞれ出向いて行かなくてはなりません。「ひろば」で大事にしたいのは、日常的空間でさまざまな専門性をもつ人も含め、多様な人たちの中で子育てをする、という環境なのです。まさに私たちのマタニティクラスは、走り回る子どもたち、生まれたばかりの赤ちゃんを身近に感じながら行われる日常性の中のマタニティクラスを目指しています。

### ②課題

#### ○集客の問題

妊婦のための両親学級などは、行政、助産院、産婦人科医院で行われている。その中であって、育児支援の場であるひろばのマタニティクラスは宣伝が難しい。

○よりひろばに根ざした活動への展開  
マタニティクラスがある日がマタニティクラス参加者だけのひろばにならないよう、通常のひろばの環境の中で実施できるよう、配慮が必要だと思われる。



## ②手をつなご

### 「プレママのためのおしゃべり広場」

実施ひろば名

NPO法人手をつなご

実施担当者

千葉勝恵（理事長兼・子育てアドバイザー）

脇田真紀子（子育てアドバイザー）

細谷美保子（先輩ママ代表）

一木 香織（先輩ママ代表）

実施日時・回数・実施場所

月・火・金(10:00~16:00)のつどいの広場開催時にいつでも参加可とした。

実施対象者

出産を控えた妊婦であれば、だれでも参加可。

実施の方法と内容

#### ① 準備

・出産を控えたプレママに広く参加してもらえるように、チラシを作成。

保健所のマタニティクラス、近隣の産婦人科・小児科、ファミリーレストラン、スーパーなどに約200部を配布。また、HP上にてもお知らせをしている。

・既に広場に参加している先輩ママには「今度プレママさんも広場にくるので、その時に出産や育児のお話をしてくださいように」と協力をお願いしておく。

#### ② 内容

・広場自体がノンプログラムであることと、広場開催時の自由参加としたこともあり、特にプログラムは組まなかった。

#### ③ 実施

・お茶を飲みながら、くつろいだ雰囲気の中でプレママと先輩ママ、スタッフとおしゃべりする。内容は出産について、出産予定の病院、現在の体調についてなど。

・広場に参加していた赤ちゃんを抱く、おむつ替えなどをして交流をしてもらう。  
・実際に子ども達と触れ合うことにより、育児の期待とよろこびを感じてもらう。

実施結果

#### ① 利用者数

・延べ 9名。(そのうち第1子出産予定のプレママは5名)

#### ② 利用のきっかけ

・友達（既に広場にきている先輩ママ）から誘われて

・広場の先輩ママ達が主催している「ご近所サークル」というネット仲間になり、誘われて

#### ③ 利用者の感想

・身近に親戚の子や友達の子などがおらず、子どもの世話をした経験もない自分には子どもというもののイメージすらなかった。プレママに参加して生身の赤ちゃんがいて、お母さん方の声があるというのが一番の貴重な体験だった。

・実際に子育てが始まってからのほうが、たくさん聞きたいことがあると思うので、赤ちゃんを連れ出せるようになったら、すぐに広場に行きたいと思っている。

・あまりに元気な子どもたちの声に圧倒された。

・育児に不安がいっぱいだが、相談にのってもらったりできる場所に出会えたことはラッキーだった。

・第2子出産なので、出産そのものに対する不安はないが、第1子の問題や気になる産後の体型についてなど、初めての時とは違った悩みがあった。広場で先輩ママにアドバイスをしてもらい、よかった。

#### ④先輩ママ・スタッフの感想

・自分が妊婦だったとき、不安だったのは「ママ友達ができるかなあ」とか「子供との生活ってどんなだろう?」「どの子育てグッズが必要で、どれが必要ではないか」など。周りに子どもが少なかったもので、インターネットで情報交換の場を探してアドバイスしてもらっていた。

出産前に実際に赤ちゃんを抱かせてもらい、抱く感覚を味わっていた。広場には月齢が同じだったり少し違っていたりもして、発達段階がお手本のように分かったり、また、個人差というのはこれなんだと、理解できたようだ。成長過程を観察できることはとても有意義なことだと思う。

・自分は出産後に「手をつなご」にきたが、以前から知っていたら、妊婦友達ができて、もっとよかったと思う。出産後に子どもと共に一から友達を探すよりも、妊婦時代から友達になって、出産後にまた会って・・・という方が楽だと思う。

・スタッフの「出産後はしばらく育児以外に何もできないから、今のうちに体と相談しながら、行きたいところへは行き、やりたいことなどはしておいた方がいいわよ。」との助言をきいて、自分にはそういうことを出産前に言ってくれる人がいなかったの、今やり残したことがたくさんあって、すごく後悔している。

・出産前に経験談を聴くなどの情報交換ができるのは貴重なことだと思う。プレママ向けのイベントを企画して情報発信するのはどうだろうか？

## 評価

### ①プログラムの意義

利用したプレママは出産前に先輩ママや赤ちゃんと交流できたことを有意義だったと感じている。先輩ママからも出産前にこういう場所を知っていたら、良かったのにとという声が多かった。

### ②必要な情報の提供

参加者の中にベビースリングに興味がある人がいた。一方、ベビースリング愛好者が先輩ママにいたので、作り方やHPの紹介をしてあげることができた。

### ③きめ細かいアドバイスの提供

出産は一人一人違うものであり、それ

に対する感じ方・取り組み方も個人差がある。基本的情報は保健所のマタニティクラスなどで提供されるが、一人一人の多様な不安に対処できるとは限らない。今回、参加されたプレママの中には不幸にして、第1子を亡くされた方がいた。参加するには、抱くことの叶わなかった赤ちゃんと同じくらいのお子さんを見ることになるので、迷ったそうだが、「手をつなご」の玄関に入った途端、子供たちの元気な様子に圧倒されて、その思いも薄らいだとのこと。

先輩ママ・スタッフとの交流を楽しんだようで、再度、参加いただいた。その時はプレママ同志が連絡を取り合っただけの参加であった。共感できることは大きな励みになる。出産後に親子で参加するのを楽しみにしていると話していた。このようなひとりひとりの諸事情を踏まえて、先輩ママ・スタッフが暖かく接してあげることが、公共の大きな施設ではできにくく、小さな広場ならではの良さであろう。

## ④問題点

プレママの参加者が少なかった。

a. 毎年、特殊出生率の低下が大きな問題になっているが、地域で妊婦の姿を見かけることが少ない。少子化で妊婦そのものの数が減っているせいだろうか。

b. 行動範囲の制約

妊娠の週数が増えれば増えるほど、プレママの行動は制約される。自転車での移動ができなくなるので、ネットなどでプレママ広場の存在を知っても、物理的距離が壁となり、参加できなかった場合もある。

c. キャリアママの増加

広場にきている先輩ママに聞いても、ほとんどの人が産休ぎりぎりまで仕事をしてきた。(特に第1子妊娠の場合) 平日の昼間に開催している広場には参加できなかったと思われる。

d. プレママの意識

初産のプレママは既におなかに赤ちゃんがいるものの、意識の中では、まだ、親にはなっていない。母親としての自覚は赤ちゃんと対面して、いろいろなことを経験して、徐々に芽生えていくものであるからだ。つわりや妊娠中毒なども無く体調の変化が余り無い人は、生活に特別な配慮をせずに、OL生活の延長のような時間を優先させてしまうのではないだろうか。

e. 今後の課題

- ・広場自体が土曜日に開催していないため、有職プレママの参加が得られなかった。平日だけではなく、土曜日や日曜日の広場の開催が望まれる。先輩ママが家族連れで参加する姿や、プレパパにも一緒に参加してもらい、出産後の育児への関心を引き出すことにもなるだろうし、先輩パパ達にとっても一段と育児参加が広がるのではないだろうか。
- ・プレママの広場参加を定着させたい。子育て広場が子連れのみだけのものではないことを広く知らせることにより、プレママの参加は増えるだろう。広く情報を発信させていきたい。

まとめ

育児不安を抱える新米ママが多くなっている現在、出産前からの支援は不可欠のように思う。「手をつなご」で、育児書だけでは理解できない赤ちゃんの感覚を体験し、おむつ替えや授乳の様子を間近にみることにより、育児経験のないプレママに赤ちゃんとの生活をイメージする手助けができたのではないかと思う。広場に参加したプレママ全員が無事に出産を終えた後、広場への参加にもつながると思う。また、何かあれば相談できる場を持てたということで安心感が得られたならば幸いである。子連れママが広場を頼りにしているように、プレママにも交友関係を広げられ、相談できる場が必要である。キャリアママが増えて、近隣に友達がいない人も多い現代ではプレママ

の交流のお手伝いの場としても広場は機能できる。

## (2)一時保育・相互預けあい プログラム

### ①みずべ

#### 「ファミサポとひろばのドッキング」

実施ひろば

江東区子ども家庭支援センター「みずべ」

ファミリーサポートの利用会員にとって、援助会員がどのような人であるか分かっている事は、初めて利用しようとしている人にとっては、大きな安心である事は容易に想像できる。センターのボランティア、また、ひろばに来所している親の中には、ファミリーサポートの援助会員として登録している人、利用会員、両方会員として登録している人がいる。

スタッフは利用したいという希望がある時は、援助会員である、ボランティア、及び両方会員である母親を紹介している。その際、預かり場として、ひろば利用も可能であり、積極的にすすめている。

ひろばでファミリーサポートの預かり場面が展開されることは

- ① 子どもにとって、いつも遊んでいる場であるので、場についてはなじんでいる。
- ② 親や援助会員にとっては、間接的に他の親やセンターボランティア、スタッフ等の見守りがあることの安心感、心強さ等のメリットがあげられる。

ひろばで、ファミリーサポート預かりを行なう際には、現在、ファミリーサポートとしての立場であるということがわかる名札をつけているので、来所している他の親から、「この様な預かり方もあるのか」と関心をもち、ファミリーサポート活用に繋がっている。

現在、年4回の区報にてファミリーサポート募集が行なわれており、その養成講座の1コマを支援センターが担当している。“最近の子育て事情”と“乳児期の

子どもの心の育ちについて”をテーマとして話をしているが、援助会員となる方が、ひろばで親子とふれあい、直接、親からの一時預かりへのニーズや期待を感じることに、また、乳幼児の子どもと接し、子どもへの関わり方を実際に学ぶ機会として、ひろばへの来所を呼びかけている。

今後の課題としては、ファミリーサポート事業を担当している所管（社会福祉協議会）との連携があげられる。

現在は、子どもの預かりは、原則、援助会員の自宅となっている事や、利用会員に援助会員を紹介するシステム（コーディネート）は初回は事務局が行なうので、直接交渉、指名は原則認められていない。しかし、初めて利用する人にとって、預かってくれる人はどのような人であるか知り選択できる事は、安定感につながることに、双方で一番良い方法の預け方、預かり方を選べる様な特性をもつことは、ファミリーサポート事業の発展につながる事だと考える。そのためにも、支援センターとファミリーサポートの事業体とが協働して、子育て支援の一つとして、この事業を推進していきたいと考えている。